

- 一 冬ざれや語らんとして人を追ふ
(朝日新聞俳壇 二〇一〇・一二・六、金子兜太選)
- 二 海や山次々越えて小鳥来る
(読売新聞「四季」欄 二〇一六・八・二四、および中公文庫掲載、長谷川權選)
- 三 ヘプバーンも小鹿に逢ひしか奈良ホテル
(朝日新聞俳壇 二〇〇九・一〇・一二、長谷川權選)
- 四 野辺山に親子ときめく星月夜
(第一九回NHK全国俳句大会 二〇一七、選)
- 五 おかし蝶いま小鳥追ふ山河かな
(奈良新聞 二〇一三・一〇・一三、南柯句会選)
- 六 疾風や燕万羽のねぐら入り
(奈良新聞 二〇一三・九・八、南柯句会選)
- 七 音立てて大地を冷ます夕立かな
(奈良新聞 二〇一三・九・八、南柯句会選)
- 八 安曇野の谷間の春やミソサザイ
(奈良新聞 二〇一四・一一・二、南柯句会選)
- 九 野仏に一声かけて紅葉狩り
(第二二回NHK全国俳句大会 二〇二〇、対馬康子選)
- 一〇 俳句あらば日本滅びず天高し
(第一七回NHK全国俳句大会 二〇一五、選)
- 一一 神代からの大和三山初苗
(第一九回NHK全国俳句大会 二〇一七、選)
- 一二 瀋陽の古箏ひびくや古都の秋
(注、行々子は才オヨシキリの別称)
- 一三 穂も揺れし喉あかあかと行々子
(注、行々子は才オヨシキリの別称)
- 一四 緋水鶏の恥じらふごとき火照りかな
(注、翡翠はカワセミのこと)
- 一五 木漏れ日やおおばずくと睨めっこ
(朝日新聞俳壇 二〇〇九・八・二四、金子兜太選)
- 一六 翡翠の沈黙破る水の音
(朝日新聞俳壇 二〇〇九・八・二四、金子兜太選)
- 一七 百日紅丸きお腹に君の手のひら
(朝日新聞俳壇 二〇〇九・八・二四、金子兜太選)
- 一八 雀来て遊び惚けよ小米花
(朝日新聞俳壇 二〇〇九・八・二四、金子兜太選)
- 一九 マスク除れば金木犀の香り立つ
(朝日新聞俳壇 二〇〇九・八・二四、金子兜太選)
- 二〇 コウノトリやがて翔び去る年の暮れ
(朝日新聞俳壇 二〇〇九・八・二四、金子兜太選)